

## 本書掲載内容における正誤のご連絡

平素はご愛顧頂き誠にありがとうございます。お求め頂きました『中小企業診断士試験問題集 2次の知識はこれ1冊! (第1刷)』につき、誤植がございましたので、お詫びし、下記のとおり正誤のご連絡を申し上げます。誠にこそれいりますが、本書をご利用の際には、ご訂正・お読み換えの上ご利用頂きますようお願い申し上げます。また、ご不明な点がございましたらAAS名古屋事務局までお気軽にお問い合わせ下さいませ。

なお、今後は誤植発生無きよう十分注意に努めさせて頂くと同時に、本書の正誤情報や補足情報を本書専用の「正誤・改訂箇所のお知らせページ」(URL <http://aasnagoya.sakura.ne.jp/download/seigo-kaitei.html>)に掲載し、随時最新情報を更新して参ります。こちらもご参照頂けますと幸いです。

この度は、誤植により本書にて学習を進められている皆様にご迷惑をお掛けし、誠に申し訳ございませんでした。重ねてお詫び申し上げます。

●お問い合わせ先●  
 AAS名古屋事務局  
 TEL (0564) 71-3988  
 FAX (0564) 54-7472  
 E-mail [nagoya@aas-clover.com](mailto:nagoya@aas-clover.com)

**【正誤表】** ※訂正箇所は赤字で示しております。 ※2014年9月9日現在(第2刷以降では修正済みの事項を含みます。)

ページ番号と訂正箇所	誤	正												
P212 解説 ②の表 回収期間法による計算 過程の4年目5年目	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 15%;">4年目</td> <td style="width: 15%;">3,000千円</td> <td style="width: 70%;"><math>2,700 - 2,800 = \Delta 100</math>千円</td> </tr> <tr> <td>5年目</td> <td>3,300千円</td> <td><math>\Delta 100 - 3,300 = \Delta 3,400</math>千円</td> </tr> </table>	4年目	3,000千円	$2,700 - 2,800 = \Delta 100$ 千円	5年目	3,300千円	$\Delta 100 - 3,300 = \Delta 3,400$ 千円	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 15%;">4年目</td> <td style="width: 15%;">3,000千円</td> <td style="width: 70%;"><math>2,700 - 3,000 = \Delta 300</math>千円</td> </tr> <tr> <td>5年目</td> <td>3,300千円</td> <td><math>\Delta 300 - 3,300 = \Delta 3,600</math>千円</td> </tr> </table>	4年目	3,000千円	$2,700 - 3,000 = \Delta 300$ 千円	5年目	3,300千円	$\Delta 300 - 3,300 = \Delta 3,600$ 千円
4年目	3,000千円	$2,700 - 2,800 = \Delta 100$ 千円												
5年目	3,300千円	$\Delta 100 - 3,300 = \Delta 3,400$ 千円												
4年目	3,000千円	$2,700 - 3,000 = \Delta 300$ 千円												
5年目	3,300千円	$\Delta 300 - 3,300 = \Delta 3,600$ 千円												
P71, 72	「②ポジショニングマップによる差別化要因の特定」内参考例図及び解答スペース部分。	解答スペースを拡張し、参考例図を削除。												
P119 上から4行目～6行目	また、付随的サービスは、顧客が本来期待する水準以上のサービスであり、顧客が「企業を選択する理由」のひとつとなるものである。	また、付随的サービスは、 <b>本質的サービスに付随するものである。本質的サービスが同一のものである場合、付随的な部分は、購買決定に大きな影響を与える。</b>												
P121, 122 図表内 右上	広告など顧客に対するマーケティング活動や通常のサービス提供業	広告など顧客に対するマーケティング活動や通常のサービス <b>提供業務</b>												
P127 上から3行目～6行目	企業内部の情報活用においては、POSシステムと顧客属性データの活用が中心となる。POSシステムにより得られるデータ	<b>まず、企業内部の情報活用については、POSシステムや顧客属性データの活用が考えられる。POSシステムを活用すること</b>												

	には、次のようなものがある。	で得られるデータには、下記の項目があげられる。
P129 上から5行目	企業外部への情報発信においては、一般消費者向け（BtoC）と企業間の電子商取引（BtoB）への応用が考えられる。	次に、企業外部への情報発信においては、一般消費者向け（BtoC）と企業間の電子商取引（BtoB）への応用が考えられる。
P133 上から4行目	（3）海外生産へのシフトへのシフトによる価格競争	（3）海外生産へのシフトによる価格競争
P190 第2問の解答 <収益性> (a)	売上高対営業利益率（売上高対販管費・一般管理費率）	売上高対営業利益率（売上高対販売費・一般管理費率）
P190 第2問の解答 <収益性> (c)	問題点は、売上高の増加率以上に販管費が増加したため、営業利益率が悪化している点である。	問題点は、売上高の増加率以上に販売費・一般管理費が増加したため、営業利益率が悪化している点である。
P196 第4問 解説 ⑤	固定資産÷純資産×100 =415÷272=152.5735…%=152.57%	固定資産÷純資産×100 =415÷272×100=152.5735…%=152.57%
P201, P202 第7問 問題・解答（設問2）	※営業利益ベース	※経常利益ベース
P202 （設問3）の解答	23%	26%
P202 解説の最終行	安全余裕率 =90,000-66,667/100,000 =23%	安全余裕率 = (90,000-66,667) /90,000 =26%

P204 解説文の下から 13 行目 ～11 行目	固定費 =総費用－変動費 =2,340－(2,552×63.58695…) =2,340－1,623 =717 百万円	固定費 =総費用－変動費 =2,340 百万円－(2,552 百万円×63.58…%) =2,340 百万円－1,622.73…百万円 =717.26…百万円 ≒717 百万円
P216 解説文の下から 5 行目 ～1 行目	投資案B キャッシュインフロー =6,000 千円×0.9009 =5,405.4 千円 5,000 千円×0.8116 = 4,058 千円 4,000 千円×0.7312 =2,924.8 千円 3,500 千円×0.6587 =2,305.5 千円 キャッシュインフローの 現在価値の合計 14,693.7 千円 投資額 <u>－14,000 千円</u> 正味現在価値 693.7 千円	投資案B キャッシュインフロー =6,000 千円×0.9009 = 5,405.4 千円 5,000 千円×0.8116 = 4,058 千円 4,000 千円×0.7312 = 2,924.8 千円 3,500 千円×0.6587 =2,305.45 千円 キャッシュインフローの 現在価値の合計 14,693.65 千円 投資額 <u>－14,000 千円</u> 正味現在価値 693.65 千円 ≒693.7 千円
P220 解説 「①データの整理」表内 項目「現有設備の現時点 での売却益」の数値	A案：△250 差額（A－B）：△250	A案：250 差額（A－B）：250
P228 解説文 2 段落	投資活動キャッシュフローは、基本的にマイナスであることが望ましい。営業活動や財産活動で得られたキャッシュを将来に向けた投資に回すことで、企業の発展が見込めるためである。	投資活動キャッシュフローは、企業の将来へ向けた投資も含まれており、積極的に投資活動を行っている企業の場合はマイナスになる傾向にある。
P230 解答 解答欄（マス目）2 行目	フリーキャッシュフローは、厳しい状況である。	フリーキャッシュフローは、厳しい状態である。
P232 解説文の下から 5 行目	製品A 0.3873 製品B 1.1609	製品A 0.3873 製品B 1.1456

P239 第19問 問題文	問題文と解答欄の間に1文挿入。	なお、差益の場合は+、差損の場合は△の符号を付すこと。
P239 第19問 解答欄	為替差損	為替差損益
P240 第19問 解答	為替差損 30万円	為替差損益 △30万円
P243 (設問1)の問題文の上から8行目～9行目	年々のフリーキャッシュフロー(以下FCF)は、第1年度末1,000万円、第2年度末1,200万円、第3年度末800万円。 なお、3年後のFCFが永久に続くと仮定する。	年々のフリーキャッシュフロー(以下FCF)は、第1年度末1,000万円、第2年度末1,200万円、第3年度末800万円である。 なお、第4年度以降は、期末に800万円のFCFが永久に発生すると仮定する。
P245 (設問1)の解答	16,552万円	16,553万円
P246 (設問1)の解説文の上から9行目～14行目	第1年度 $1,000 \div 1.05 = 952$ 第2年度 $1,200 \div 1.05 \times 1.05 = 1,088$ 第3年度 $800 \div 1.05 \times 1.05 \times 1.05 = 691$ 第4年度以降 $800 \div 0.05 = 16,000$ $16,000 \div 1.05 \div 1.05 \div 1.05 \div 1.05 = 13,821$ $952 + 1,088 + 691 + 13,821 = 16,552$ (単位:万円)	第1年度末 $1,000 \text{万円} \div 1.05 = 952.38\cdots\text{万円}$ 第2年度末 $1,200 \text{万円} \div 1.05 \div 1.05 = 1,088.43\cdots\text{万円}$ 第3年度末 $800 \text{万円} \div 1.05 \div 1.05 \div 1.05 = 691.07\cdots\text{万円}$ 第4年度末以降 $800 \text{万円} \div 0.05 = 16,000 \text{万円}$ $16,000 \text{万円} \div 1.05 \div 1.05 \div 1.05 = 13,821.04\cdots\text{万円}$ 第1年度末～第4年度末以降を合計すると $952.38\cdots\text{万円} + 1,088.43\cdots\text{万円} + 691.07\cdots\text{万円} + 13,821.04\cdots\text{万円} \approx 16,553 \text{万円}$
P269, P273	貸借対照表 左側の最終行 「合計」 貸借対照表 右側の最終行 「合計」	「資産合計」 「負債及び資本合計」
P274 第2問 下から8行目	・投資時期:平成25年期首	・投資時期:平成25年度期首
P292 下から2行目～ P293の上から1行目	また、損益計算書からは、売上高の上昇に比べ、売上原価は上昇しているが、販管費、営業外費用は悪化していないことから、「売上高対売上原価率」が特定できる。	また、損益計算書においても、「売上高対売上原価率」が悪化しており、与件文の内容と経営指標が一致するのである。
P293	(a) $270 \div \{1 - (400 \div 800)\}$	(a) $270 \div \{1 - (440 \div 800)\}$

問題1の解説文の 下から10行目		
P295 指標表題	損益計算書	損益計算書からのアプローチ
P295 指標表題	キャッシュフロー計算書	キャッシュフロー計算書からのアプローチ

以上